葉石濤と『台湾男子簡阿淘』

迫　田　博　子

一　はじめに

台湾では、第二次世界大戦終了後を「光復」とよぶ。いわゆる「光復」とは、イレデンティズム（irredentism）を表す中国語の表現であり、敷衍すれば、「異民族統治の暗い時代から祖国統治の明るい時代へ戻った」[1]という意味である。だが、実情は反していた。1947年に起きた「二・二八事件」では、本省人に対する残酷きわまりない、過剰な殺戮や粛清、鎮圧が行われた。それ以降も国民党政府一党独裁による強権政治の支配のもとで、民主的とはいえぬ不穏な時代が約四十年以上に及んだ。

長らく、この時期に起きた事実や出来事について明言することはタブー視され、台湾の言語空間で語られることは皆無に等しかった。このような時世の中で、文学界においても創作や表現の許容度が極めて狭窄なものであったことは想像に難くない[2]。1987年、戒厳令（1949年施行）が解除され、民主化の動きと連動してようやく多くの記録書や回想録が刊行されるようになった[3]。

1990年に出版された葉石濤の『台湾男子簡阿淘』[4]は、まさしくこの年代にスポットをあてた作品であり、作中のエピソードの多くは作家自身の実体験に基づいている。葉石濤は政治犯として逮捕、投獄され、釈放後も様々な蹉跌や苦悩と隣り合わせの人生を強いられた。眼間に浮かぶ過去の残像を追憶する時、再び傷口が疼きだすこともあろう[5]。だが、葉は単に個人的な感傷に浸ることなく、自身が遭遇した過酷な試練を創作の源泉としながら、封印してきた記憶の再構築を試みた。

ところで、『台湾男子簡阿淘』について、これまでどのような見方をされてきたのだろうか。例えば、林玲玲は本書を回顧録のカテゴリーに分類したうえで、アイデンティフィケーションという観点から論じている[6]。彭瑞金は、「極めて濃厚な政治性を持つ作品であると同時に、書中に書かれているのは台湾で生きる人々が共有すべき記憶」[7]だと述べている。また、陳芳明は次のような見解を示す。「葉石濤は一九八〇年以後、［中略］自己描出(self - representation)の方式を選択し、自伝的な文体の営みに力を尽くしてきたが、そこには必然的に彼の追及する歴史の解釈と文化的アイデンティティが込められている。」[8]これらの見解からもわかるように、『台湾男子簡阿淘』は、政治的色彩を帯び、かつ歴史的題材を内包した自伝的小説であると評されてきた。

本稿は、『台湾男子簡阿淘』の内容を具体的に検討することにより、従来の評価とは異なる側面からのテーマ及び人物像を抉り出す試みをしたい。葉石濤は、負の過去が付随するその記憶を、どのような思いをこめて語っているのだろうか。また、作中において、単に事件を登場させるというのではなく、それをいかに描いたのか。その際、台湾の一知識人が困難な時代と対峙した生き方について、とりわけ注視しながら考察を進めていく。

二　『台湾男子簡阿淘』及び同ジャンルの他作品について

冒頭で述べたように、戒厳令解除後、台湾の歴史におけるさまざまな禁忌が解かれる中で、歴史的記憶を再構築する作品が多く刊行された。この潮流は同時に、作家たちにより、台湾の歴史や文化の主体性に対する探求が展開されていることをも意味する[9]。『台湾男子簡阿淘』とほぼ同様の時代背景や題材を扱った作品を幾つか見てみよう。

例えば、呉濁流は『無花果』や『台湾連翹』[10]の中で、事件体験の記憶を残している。のみならず、国民党官僚の腐敗ぶりや国民党政権にへつらう台湾エリートの実態をも暴露した。この二冊の著書は歴史の真相究明に重点がおかれ、現在でも二・二八事件の最も貴重な証言記録の一つだといわれている[11]。また、李喬の『埋冤一九四七埋冤（上・下)』[12]、上巻は事件当時、台湾各地

で起きた実話を記載したノンフィクションであるが、下巻の長編小説では、ナショナル・アイデンティティの追求という主題を盛り込む[13]。さらには、二・二八事件をテーマの中心に据えた鍾肇政の『怒濤』[14] などが挙げられる。『怒濤』は、おびただしい日本語や北京語、閩南語、客家語を使用し、言語混交現象（hybridity）という技法を用いて、戦後初期の台湾社会におけるカルチュラル・アイデンティティの混乱ぶりを表現している[15]。

では、『台湾男子簡阿淘』のコンセプトは何か。葉石濤は次のように述べている。

> 戒厳令解除後には、二・二八事件や白色テロをテーマとする作品が多く刊行されているが、欠落している部分も少なからずあるように思われる。私は戦後の世相に目をむけるばかりでなく、かの暗黒な時代を生き、抗議した者たちの思想傾向や心理の深層に潜む恐怖、願い、悲しみをより明確に伝えたい。[中略]『台湾男子簡阿淘』では、戦後の出来事を断片的に取り上げるのではなく、時代の一連の流れを書き留めたい。[中略]それは同時に、台湾の若き一知識人の彷徨、葛藤から覚醒に至るまでの道程の記録でもある。[中略]無論、小説はフィクションであり、全て実話ではない。だが、主人公の簡阿淘がもがき苦しむ過程はすなわち私がもがき苦しんだ過程であり、彼は私自身を投射した人物だといってよい。作中に描かれた簡阿淘の体験はすなわち私の実体験でもある[16]。

> 二・二八事件及び白色テロ時代には、胸に迫る物語が数多くあり、それらはいまだ歴史の墓場に埋もれている。台湾文学において、この分野は未開拓の沃野といえよう[17]。

以上、葉が自ら語った言葉を整理すると次の二点に集約することができる。

①歴史の表側に起きた事象だけでなく、精神面や思想面などの内面世界にも注視する。登場人物たちの内側の叙述に重きを置く。

②事件を断片的に取り上げるのではなく、二・二八事件より白色テロ時代に至るまでの流れに沿って時系列で進行する。

三　葉石濤略伝[18] ――雨に負け風に負けつつ生きてゐる柔らかき草人を坐らす[19]

先述のごとく、主人公簡阿淘は葉石濤の分身であり、物語の内容も葉の実体験がベースとなっている。そこで、作者の人生の軌跡について振り返ってみよう。

葉石濤は、1925年11月１日、日本統治下の台湾・台南市の名望ある旧家に生まれた。二千ヘクタールの土地を所有する地主階級であったため、八代目にあたる葉石濤は衣食住に欠くことなく、たいそう裕福な生活を送っていた。五歳で私塾に入り、『大学』、『三字経』などを習った後、1932年に末広公学校（現・台南市立進学国小。なお、公学校とは日本統治時代における台湾籍学童のための初等教育機関である。）に入学し日本語教育を受ける。1936年には台南州立二中（現・台湾国立台南第一高級中学）の試験に合格。葉石濤は幼少時よりたいへんな文学好きで、学生時代は日本文学のみならず、台湾で入手できる著名な世界文学をほとんど読破した。15歳、処女作「媽祖祭」（佚文）を『台湾文学』に投稿、佳作に入選。続けて「征台譚」（佚文）を『文芸台湾』に投稿し、それが縁で、高校卒業後は『文芸台湾』雑誌社にて編集助手を務める。この間、「林君からの手紙」などを発表した。

1945年、20歳で陸軍二等兵として軍隊に召集されるが、終戦を迎え、帰郷する。終戦後は日本語から中国語への転換に努力し、小学校の教師として勤務する傍ら、1948年以降は中国語で文筆活動を続け、新聞の文芸欄などで発表していた。

しかし、不運にも五十年代の白色テロが葉石濤を襲う。27歳の時にある台湾共産党分子と知り合ったことが原因で、1951年に「検粛匪諜条例」（「知匪不報」。スパイと知りながら通報しなかった罪）違反となり、逮捕された。五年の有期徒刑の判決を受ける。1954年秋、恩赦による減刑で釈放されるが、その後の生活は悲惨を極めた。元政治犯の烙印を押され、社会復帰は容易ではないうえ、国民党の農地改革により故郷の農地を失う。葉は、田舎の小学校の代用教員を勤めながら、台湾各地を転々とする。加えて、出獄後も当局の執拗な監

視が続いていたため、再び逮捕される恐怖に怯える日々を送っていた。

1959年、友人の紹介で高雄市出身の陳月得と結婚し、二子をもうける。1965年、これまで続けてきた小学校の教師を辞し、台南師範学校（現・台南教育大学）に編入学。十五年ほど筆を折っていたが、1965年『文壇』で短編小説「青春」、『台湾文芸』で評論文「論呉濁流「幕後支配者」」などを発表し、台湾文壇に復帰する。1966年に台南師範学校を卒業後、小学校に勤めると共に本格的に創作活動を再開。1968年に初の小説集『葫蘆巷春夢』（蘭開書局）、『葉石濤評論集』（蘭開書局）を出版し、それ以降、主に小説と評論の二輪で歩んだ。

あまたの試練を乗り越えながら、葉は孜々として書き続けた。例えば、『台湾文学史綱』（文学界出版社）は台湾で最初の台湾文学通史であり、楊照は「我々は文学史といえば、すぐに葉石濤を思い出す」[20]というほど、台湾文学史観を構築したことに多大な意義を持つものと評されている[21]。「没有土地、哪有文学（大地なくしては文学はありえない）」と語るように、生涯、一貫して真摯なまなざしで台湾社会や人々を見つめ続ける。戒厳令解除後も、精力的に作品を発表し、台湾文学の発展のために大いなる力を注いだ。

1999年、成功大学において名誉博士を授与され、同校の台湾文学研究所にて教鞭を取る。

2008年『葉石濤全集』[22]が出版され、それを見届けてからのように、同年12月11日、83歳でこの世を後にした。葉石濤の歩んだ道のりを把握したうえで、次節では、いよいよ内容についての検討に入る。

四　二・二八事件――「死」の意味するところ

『台湾男子簡阿淘』は主に以下の三つのテーマを中心に据えている。①二・二八事件②白色テロ時代に主人公が政治犯として逮捕、投獄される③釈放後の日々。

本作の幕開けは1947年に起きた二・二八事件である。時計の針をその少し前に巻戻してみよう。事件が起きた背景として、作中で、「光復後、民たちの生活は成り立たず、インフレで急増した失業者は街角にあふれ、首吊り自殺は日

常茶飯事となった」[23]と描写されているように、1945年、接収された台湾では、国民党政権（台湾省行政長官公署）の官僚の貪官汚吏ぶりが横行していた。さらに、無策な施政により経済状況の悪化に拍車をかけ、失業者の急増、食料不足やインフレなどの問題を招く。そのため、社会の混乱や人々の不満は深刻化をたどる一途であった[24]。

さて、焦点を本作に戻し、二・二八事件を背景に起きた三つの死の場面を見てみる。一人目の死者は、翁家の長男で台湾大学の医学生の徳銘である。翁家は、台南で代々名士を輩出している名家であるにもかかわらず、その葬儀はひっそりと秘密裏に執り行われた。というのも、徳銘は深夜にリーダーの邱玉晨に率いられ、簡阿淘たちとともに総勢十六名で広東省からやってきた兵隊の駐屯地へ向かう途中、奇襲にあったため亡くなったからだ。

台北で起きた二・二八事件を知った台南の人々もざわついていた。正義感に燃え結成された仲間ではあるが、メンバーのうちで、簡阿淘が顔見知りなのはリーダーや翁徳銘、看護婦の葉秀菊の三人だけである。当初の目的は、武力行使をせずに、邱玉晨が談判して軍隊所有の武器を譲渡してもらうことであった。しかし、作戦はあっけなく失敗に終わり、邱玉晨と翁徳銘はその命を落とす。名前すら知らぬ他のメンバーたちが一目散に逃げだすなかで、暗闇に身を潜める阿淘と葉秀菊は、流れ弾にあたり、出血が止まらない翁徳銘が息を引き取る最期の瞬間を看取る。

> あたり一面漆黒の闇に覆われ、荒涼としたサトウキビ畑の中で、彼（阿淘―引用者注）と葉秀菊の二人は亡骸を撫でながら慟哭せずにはいられなかった。ちぎれんばかりに溢れる悲しみは行き場がなく、目の前に迫る危険すらも忘れてしまうほどであった。ようやく、葉秀菊がきっぱりと言った。「今は悲しんでいる場合じゃない。何としてでも遺体を台南の翁家に送り届けなきゃいけないわ。そうでないと、亡くなった人だけでなく、彼の家族や私たちみなに累が及んでしまう[25]。」

遺体を運ぶリアカーを貸してくれたのは、以前、邱玉晨に紹介された虎崎郷の郷長の林貴男であった。しかし、その彼も罪状不明のまま公開処刑されてし

まう。

彼の顔色は蒼く、憔悴しきっていたが、でも、力強さが漲っていた瞳は瞬きもせず、遠くの紺碧の空をずっと見つめていた。まるで、遥か彼方には解き明かせぬ自由と幸せの謎が隠されているかのように。意外にも、死刑の執行を宣告するような大げさで悲劇的な儀式はなかった。ひっそりと静まりかえったなかで、銃殺刑はあっさりと執り行われた。[中略]やにわに、右側にいた兵士がいつの間にか抜いたピストルを林貴男の後頭部にあてながら引き金をひいた。たて続きに三回の発砲音が聞こえ、林貴男の体は前へと崩れ落ちた。真っ赤な血は芝生を染めた[26]。

三つ目の死は、犠牲となった実在人物である弁護士の湯徳章が描かれている。

簡阿淘は自分の目でしかと見た。台南の大正公園で、あの容貌魁偉な湯徳章弁護士が処刑されたところを。その血痕はいつまでも大正公園のセメントの地面に残り、水で洗い流すことはできなかった[27]。

以上、三人の「死」の場面を取りあげてきたが、はたして、「死」の意味するところは何であろうか。不本意に命を絶たれた登場人物たちは、史実と同じく、いずれも台湾社会における良質な人材やエリート層である。失われたのは人命ばかりではない。彼らの死が台湾社会にとっても大きな損失を意味することは論をまたない。また、死の場面と共に「血」の描写も見られるが、事件で流された血は、台湾現代史上に残る汚点を表すメタファーであろう。葉石濤の沈痛な思いや義憤が込められているように感じられる。

実際のところ、事件後、無差別の虐殺と粛清に怯えた台湾社会は、極度の恐怖の闇に覆いつくされた。1949年に戒厳令が実施され、1950年以降、厳しい住民監視体制の下、国民党政府は共産党スパイの取り締まりを行い、この「赤狩り」に名を借りた恐怖政治が白色テロと呼ばれている。主人公の阿淘も時代の荒波に翻弄されることとなるが、一介の市民にすぎない彼がなぜ政治犯として逮捕され、囚われの身になってしまうのだろうか。次節では、この点について検討する。

五　白色テロの嵐が吹き荒ぶ時代

国民党政府の強権政治のもとで、二・二八事件に続く第二の災難――白色テロの嵐が吹き荒ぶ時代が到来する。本節では、小学校教師を勤め、平凡な日常を送っていた主人公が政治犯として投獄されるいきさつや獄中生活について考察を進める。

事の顛末はこうであった。光復間もないころ、簡阿淘はかつての同級生、許尚智に上海で出版された一冊の雑誌を手渡される。日本語教育をうけた世代の阿淘たちにとって、言語転換は乗り越えなければならない高いハードルであるうえ、いつまでも「かつての統治者の言語で文章を書くのは台湾人として恥ずべきことであり、魯迅のような口語文で文学創作に勤しむ」[28] ことを目標として、中国語の習得に懸命に取り組んでいた。ある時、阿淘は許尚智から中国本土で刊行されているものを取り扱う「阿才老頭（阿才おじさん）」を紹介される。

阿才老頭は、戦時中から反政府的な活動家で、植民地政府のブラックリストに載っていた人物である。中国へ亡命し、「大陸から戻ってきた後は、流暢な北京語が話せるようになっただけでなく、なんでも、多くの書物をかなり勉強した」[29] そうだ。その阿才老頭の家には偽名を使う紳士や小学校教師、大工など様々な階級の人々が出入りしていた。阿淘はそこで中国で出版された数冊の雑誌を手に入れ、台湾を再解放する話などを耳にする。数回、阿才老頭の家に出入りしただけで、それ以上交流を深めることはなかった。

それから六年あまりが過ぎ、1951年のある夜更けに阿淘は突然逮捕される。罪名は「知匪不報（スパイと知りながら通報しなかったこと）」である。かつて知り合った阿才老頭たちは台湾共産党の一派であったという。面識があるとはいえ、数冊の書籍を購入したにすぎず、特段深い付き合いもないと必死に無実を訴えても聞き入れてもらえない。阿淘は「まるで千斤ある重い鉛の塊で押しつぶされそうになり、立っていられないほど」[30] の絶望感で打ちのめされてしまうのだった。

五年の実刑判決をうけ、過酷な獄中生活が待っていた。「簡阿淘はこの便器

で用を足すだけでなく、便器から漏れている水で歯磨きや洗顔を済ませていた。」[31] 劣悪な環境のもとで囚人たちは人間以下の扱いを受ける。それは死よりも生きる方が必ずしも楽とはいえない日々であり、多くの屈辱を耐え忍びながらの生であった。

このような境遇の中で生きる主人公の人物像について、陳芳明は次のような見解を提示している。

> 蒼茫たる歴史の水域で、簡阿淘は一度たりとも英雄を演じることはなかった。それどころか、葉石濤の歴史小説の中において、毅然としている人格が出現したことはない。だからこそ、物語はより歴史の真実に迫っている。「アンチヒーロー」言説に基づき描かれた登場人物は、決定的な行動力を持たない理想主義者でもある[32]。

確かに陳の指摘は的確だといえる。暴虐な国家権力に対し、無抵抗な一市民にすぎない阿淘はなす術もない。その人物像は、英雄とはかけ離れているものであろう。しかし、度し難い辛酸を嘗め尽くしながらも彼は辛抱強く生き延びていく。「英雄」とよべないまでも、その生命力には不屈な強さを秘めているのではなかろうか。ゆえに、主人公の人間像を認識していくうえで、新たな見方が存在しうると考えられる。次節では、出獄後に歩んだ道のりを考察しながら、この問題点を明かす試みをしたい。

六　釈放後――喪失と再生の道のりをたどって

前節では、阿淘が逮捕されるいきさつや獄中生活について検討した。国家の暴挙を目前にして、彼は抵抗やアクションを起こさず、不条理を受け入れつつ生きながらえてゆく。それを行動力がなく、弱い人格の持ち主だとみなす指摘もある。阿淘は出獄後、さらなる困難に直面するが、この先、一連の屈辱と苦痛から彼はいかに自己を回復させていくのだろうか。本節では釈放後の生き方を考察することにより、主人公の人物像の新たな側面を抉り出す。

最初に、出獄直後の阿淘がおかれた状況について確認をしよう。

五十年代は閉塞かつ恐怖にみちた社会である。簡阿淘のような軍人監獄（政治犯専用の監獄の呼び名―引用者注）から戻ってきた者には残酷そのものだった。台南は彼が生まれ育った故郷なので、知人友人も多くおり、みなは阿淘のことをよく知っていた。しかし、彼が帰ってきた頃から、街中を歩いていても、あたかも無人地帯に足を踏み入れたように、知り合いは全て消え去ってしまった。[中略]彼を見かけると、まるで幽霊を見たかのごとく慌てて顔をそむけて路地に入っていく人。また、ある人たちはじっと彼を直視しながらも、一言も発せず、そのそばを通り過ぎていくのだった[33]。

元政治犯の烙印を押され、郷里の人々からは疫病神のように敬遠される。かつては小学校教員の阿淘であったが、再就職はままならず、ようやくありつけた仕事は雑用をこなす臨時採用の用務員である。「ここまで落ちぶれたら、もはや他人に踏みつけられる」[34] ように生きるほかないと考える彼の苦しみはやり場がなく、周囲の保身的な利己主義の冷たさが胸に突き刺さる。

この世界に存在する言葉では言い尽くせぬほどの悲しみや憤りを抱えながら、自堕落な日々をやり過ごす阿淘は、酒をあおることでしか鬱憤をはらすほかなかった。「私はいつも酔いつぶれるまで飲んでいた。」[35] ある晩、屋台で家業を手伝うかつての教え子と偶然再会する。それは、阿淘が投獄された時に危険を顧みず、クラスからカンパを集め、生活用品を送ってくれた教え子であった。彼女は、今の自堕落な生活から抜け出すよう力説し、その励ましは、人生の暗い隘路をとぼとぼと独行する阿淘にとって一筋の光明となる。

「先生、うちの父さんが言っていたけど、先生はお酒を飲みすぎです。それに、今の仕事は先生の身分にあっていません。このまま続けるのではなく、何か他の道を探すべきです。」秋霞（教え子の名前―引用者注）は静かに話しながらも、その口ぶりはきっぱりとしていた。[中略]「先生は上を目指さないと。今のまま落ちぶれていくべきではないでしょう。」私は涙で目の前がぼやけ、おぼろげな下弦の月を見つめていた。ずっと何も言い出せぬままでいたが、秋霞と別れた後、迷わず前に向かい歩き続けた。次の日から、用務員の仕事を辞めた[36]。

「迷わず前に向かい歩き続けた」という一文は、負のスパイラルから抜け出そうとする、主人公の決意を語っていよう。こうして、阿淘は自暴自棄な生活にピリオドを打つ。かすかな光に導かれるかのように、再び自らの足で立ち上がる契機を掴み、新たな一歩を踏み出していく。

その後、阿淘は小学校教師の採用試験を受け、必死に人生を建て直し、家庭を持つことができた。二十年ほど時が流れ（1970年代）、以前ともに政治犯として服役した友人が再度逮捕されたと聞き、その家族を心配した阿淘は様子を見にゆく。ところが、親切心から出たこの行動は再び災難を招いてしまう。特務警察たちは相変わらず監視の目を光らせていたため、阿淘は「警備総司令部」に出頭を命じられる。尋問官を見た時、「やつは太っていて、まるで布袋様のよう。足は短く、歩く姿はボールが転がっているみたいだ」[37] と、阿淘は嫌悪感や皮肉をこめ、尋問官をデフォルメして描写している。

特務警察たちから身体的暴力を受けるなど、屈辱的な事情聴取であった。ようやく無実であることが判明し、阿淘は釈放される運びとなる。

> 尋問の部屋から出ようとした時、布袋様は満面の笑みを浮かべ、恭しく、再三にわたって阿淘に言った。「もしも尋問の内容に関して何か言い忘れたことがあれば、すぐ戻ってきて教えてくれたまえ。いつでもお待ちしております。」これを聞いた簡阿淘は、あきれ果ててしまい、布袋様は頭がいかれているのではないかと思った。彼はさっさと外へ出ていき、チラッと時計を見たら、ちょうど十一時半だった。今から勤務先の小学校へ戻れば、まだお昼に間に合う[38]。

このような不愉快で苦痛な思いを強いられ、阿淘の心中はいかばかりか。それでも、いささかのためらいを見せることなく、素早く気持ちを切りかえてゆく。現在の職場に急いで戻ろうとする様子からは、釈放された安堵感の表れというよりも、「今」を生きる主人公の静かな強さが滲み出ている。苦難に鍛えられ、何事にも執着しない潔さが彼の内側に備わっている。これまで、国の暴挙により多くを奪われたが、人生の隙間に自己決定権や主体性を持たせる意思表明だとも捉えられよう。憎悪ではなく、理性を力として。

前節では阿淘の人物像について、行動力を持たぬ軟弱な人物という見方があることを紹介した。しかし、どんなに辛く苦しくとも、わが身に降りかかった試練や不条理を受け入れ、粘り強く乗り越えてゆくその生き方を見ると、はたして彼を弱い人間だと決め付けられるのだろうか。阿淘は出獄後、自暴自棄の生活に終止符を打ち、自ら立ち上がった。暴虐な国家権力には雄々しく立ち向かうことはしなかったが、己の人生には行動力を持ち続けた。その生き様は、人間の持つレジリエンス[39]（reslience）が秘められている。

以上、出獄後に歩んだいばらの道を考察したうえで、阿淘の人物像について認識を新たにすることができた。また、剣呑な人生を生き、多くを失った主人公ではあるが、その道程は喪失と再生を体現した側面をあわせもつことも明らかとなった。

七　おわりに

ここまで検討してきた通り、葉石濤は自身の体験を『台湾男子簡阿淘』に投影し、封印してきた過去の記憶を再構築している。だが、それは一個人の思い出話には終わっていない。従来、本書は自伝的小説にカテゴライズされる作品ではあるが、その枠組みにとどまらず、人権や尊厳を求めながらも抑圧されてきた人々を記憶する営みも含まれている。

次に、描かれた台湾の戦後史の背後には、一人の人生における「喪失と再生」というテーマが潜んでいることが明らかとなった。主人公は横暴な国家権力によって人生を打ち砕かれ、奈落の底へと突き落とされる。彼がもがき苦しんだ先には、安易に明るい見通しを見せてくれてはいない。しかし、慟哭ののちに人生の奥底に横たわるのは、諦念や哀惜だけではあるまい。再び自らの足で立ち上がるその姿にはレジリエンスが備わっており、ほのかに救済の可能性が見え隠れする。このような観点から考えると、国家に対しては抗えずにいたが、阿淘は自身の人生を生きていくうえで、粘り強く行動力を持ち続けたといえる。それゆえ、一概に軟弱な人物であるとは断言できない。

葉石濤は、歴史の深層で変わることなく執拗に引き継がれてきたものを見定

め、個人史のみならず、人間世界の不条理やその中で苦闘する魂の輝きをも描き出した。しかしながら、本稿では主人公の思想遍歴や内面の揺らぎなどについて、充分な検討を加えることができず、引き続き今後の課題としたい。

注

1）何義麟『台湾現代史――二・二八事件をめぐる歴史の再記憶』(平凡社、2014年) 10頁

2）台湾文学の高名な作家である呉濁流は、1970年に事件体験を含む自伝小説『無花果』（林白出版社）を発表したが、この本はただちに発禁処分を受けた。詳しくは、中島利郎、河原功、下村作次郎編『台湾近現代文学史』（研文出版、2014年）194頁などを参照されたい。

3）中央研究院近代史研究所『口述歴史』編輯委員会『口述歴史』（中央研究院、1989年)、林双不編『二二八台湾小説選』（自立晩報、1987年)、李敏勇『傷口之花』（玉山社、1997年）などがある。

4）葉石濤『台湾男子簡阿淘』（前衛出版社、1990年）なお、本稿で使用するテクストは、彭瑞金編『葉石濤全集』(国立台湾文学館・高雄市政府文化局共同出版、2008年）に拠る。

5）葉は「できることならば、戦後のあの痛ましく、辛い時代は二度と思い出したくない。涙はすでに枯れた」と、述懐している。「一個台湾老朽作家的告白」、『台湾現当代作家研究資料纂編15　葉石濤』所収（国立台湾文学館、2011年）130頁

6）林玲玲「戒厳後「台湾意識」的重塑――以葉石濤『紅靴子』等回憶性小説為例」(『黄埔軍報』第五十六期、2009年)

7）彭瑞金「府城之星・旧城之月――葉石濤的文学歳月」、前掲書『葉石濤全集23』所収、445頁

8）陳芳明著、井手勇訳「植民地主義と民族主義――台湾作家葉石濤の苦境、一九四〇～一九五〇」、台湾文学論集刊行委員会編『台湾文学研究の現在』所収（緑蔭書房、1999年）160頁

9）張原銘「台湾におけるポストコロニアル研究の現状と課題の一考察」(『立命

館産業社会論集』第39巻、2003年）70頁

10）呉濁流著、鍾肇政訳『台湾連翹』（台湾文芸出版社、1987年）なお、この著書は日本語で書かれていた。その内容があまりにも赤裸々であったため、作者本人の意思により発表を凍結。戒厳令解除後、ようやく翻訳出版された。詳しくは、下記注釈11）を参照。

11）褚昱志「拼命文章才堪誇――試論呉濁流『無花果』与『台湾連翹』」（『台湾文学観察雑誌』第七期、1993年）56―79頁

12）李喬『埋冤一九四七埋冤（上・下）』（海洋台湾出版社、1995年）

13）洪英雪「論『埋冤一九四七埋冤』的写作模式与主題意識」（『弘光人文社会学報』第５期、2010年）41―61頁

14）鍾肇政『怒濤』（前衛出版社、1991年）

15）陳芳明『後殖民台湾―文学史論及其周辺』（麦田出版社、2002年）114頁

16）前掲書『台湾男子簡阿淘』自序、３―４頁。なお、本稿の日本語訳はすべて筆者によるものである。

17）葉石濤「談二二八文学」、『台湾文学的困境』所収（派色文化出版社、1992年）48頁

18）前掲書『葉石濤全集』、葉石濤『府城瑣憶』（派色文化出版社、1996年）など、葉自身の回想類の文章及び前掲書『台湾近現代文学史』292―302頁を参照したうえで作成。

19）伊藤一彦『月の夜声』所収（元阿弥書店、2009年）

20）楊照『夢与灰燼』（聯合文学出版、1998年）106頁

21）前掲書『台湾近現代文学史』297頁

22）前掲書『葉石濤全集』の構成は以下の通りである。小説五巻、随筆七巻、評論七巻、資料一巻、翻訳三巻。全二十三巻。

23）「紅靴子」、前掲書『葉石濤全集４』所収、107頁

24）伊藤潔『台湾――四百年の歴史と展望』（中央公論新社、1993年）76頁

25）「夜襲」、前掲書『葉石濤全集４』所収、308頁

26）「夜襲」、同上書、322頁

27)「夜襲」、同上書、319頁。湯徳章は、1907年日本人警官と台湾人女性の間で生まれ、中央大学を卒業したのち、台南に戻り、弁護士を開業する。名士として活躍していたが、二・二八事件では一夜の拷問と市中引き回しされた後、公開処刑され、死体の収容も禁じられた。

28)「紅靴子」、同上書、105頁

29)「紅靴子」、同上書、108頁

30)「紅靴子」、同上書、131頁

31)「牆」、同上書、144頁

32) 陳芳明「葉石濤与陳映真――八十年代台湾左翼小説的両個面相」(『台湾文学学報』第十七期、2010年) 39頁

33)「邂逅」、前掲書『葉石濤全集４』所収、248頁

34)「吃猪皮的日子」、前掲書『葉石濤全集３』所収、428頁

35) 同上

36)「吃猪皮的日子」、同上書、431―432頁

37)「約談」、前掲書『葉石濤全集４』所収、299頁

38)「約談」、同上書、305頁

39) レジリエンスとは回復力、乗り越える力。例えば、Grotberg(1999)は次のように定義している。「逆境に直面し、それを克服し、その経験によって強化され、また変容される普遍的な人の許容力。」詳しくは斉藤和貴、岡安孝弘「最近のレジリエンス研究の動向と課題」(『明治大学心理社会学研究』第４号、2009年) 72―84頁を参照されたい。

(さこた　ひろこ・お茶の水女子大学大学院博士後期課程)